3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

建物は津波で全壊したけれど利用者さんのため早期に活動を再開。

生活介護事業所　のぞみ福祉作業所①

◎職員：森伸也さん

― 被災後の旧事業所 ―

― 現在の事業所の看板 ―

3.11 当日　防災訓練の予想をはるかに超えた津波が襲来し、間一髪で避難。

南三陸町にある「のぞみ福祉作業所」では、利用者さんが活動を終え、帰りの会を始める準備をしていたところで地震が起こりました。自閉症の利用者さんが1人、多目的トイレに閉じこもってしまったものの、全員の無事を確認。職員の森さんはその時、3月2日に行ったばかりの防災訓練を思い出していました。「ここにいれば雨風もしのげるし、ご飯もあるし、避難といっても2日や3日のものだろう」。しかし森さんの予想をはるかに超え、作業所の建物を大津波が襲いました。利用者さんと職員は津波にのまれた後、何とか裏山に建つ志津川高校に避難することができたのです。

避難所　志津川高校の先生方や社会福祉協議会の計らいで、避難所生活を乗り切る。

志津川高校に身を寄せた利用者さんと職員は、学校側の計らいで、早くに教室を確保してもらえました。食料不足には困りましたが、飲料水があったことと、教室にはストーブがあったので暖をとることができ、体力を温存することができたといいます。志津川高校の先生が、高台の団地の集会所で炊き出しをしていることを知り、先生方と南三陸町社会福祉協議会の配慮で、団地からおにぎりを分けてもらうことができました。

利用者さんは、何か大変なことが起きていることを肌で感じたのか、みなさんパニックを起こすこともなく静かにしていました。また気心の知れたメンバーと一緒だったからか、安心感もあったようです。避難を機に団体行動を余儀なくされましたが、何とか乗り切り、3月18日までにはそれぞれの家族のもとに戻ることができました。

再開前　「のぞみ」で活動できない2ヶ月が、利用者さんにはとても長く感じていた。

利用者さんが家族のもとに戻ってから、職員は各避難所をまわって家族と一緒にいる利用者さんの元を訪れることが日課になりました。この時助かったのが、法人内の車両を緊急車両として扱うという取り決めがなされ、優先的にガソリンを確保できたことです。森さんは被害を逃れた法人の事業所で、急遽福祉避難所となった施設から支援物資を分けてもらい、車で利用者さんに届けにいきました。この時、多くの利用者さんや家族にいわれた言葉が「のぞみはいつ再開するの？」。利用者さんは、仲間と活動ができない日々をとても長く感じていたのです。

しかし「のぞみ福祉作業所」の建物は全壊して、同じ場所に戻ることはできません。森さんはすぐに、活動を再開できる別の場所を探し始めました。その甲斐あって、3月末に場所が確保でき、プレハブもレンタルで入手する段取りがつきました。こうして5月末には仮設の作業所が再開され、利用者さんに再び仲間と共に活動できる日々が戻ったのです。

（2 枚目に続く）